絵本の夜・紙芝居の朝 Vol. 5

佐倉桃史®（さくらももふみ）

1998 年 9 月 7 日、地中海マルセイユ沖で、アントワーヌ･ド･サン=テグジュペリ少佐の名を刻んだ銀製のブレスレットが発見されました。第二次世界大戦中の 1944 年 7 月、自由フランス軍の飛行士だった彼は偵察任務中にこの世界から忽然と姿を消しました。命懸けの任務を遂行する日々のなかで人間界の実相を鳥瞰しながら書かれた、簡潔で美しい文章をわずかに遺して。

サン=テグジュペリの小説『小さな王子様』は『星の王子さま』という邦題でよく知られています。

日本での初版が内藤濯訳のやさしい日本語で、しかも岩波少年文庫の一冊として出版されたため「童話」という印象が強い本作ですが、本来は大人達に向けて、つまり解消の困難な屈託や愛憎を抱えてしまった人達に向けて書かれているのだろうということは、随所に現れる屈折した言葉遣いを見れば明らかです。

「ああ、泣きそうだ」とキツネは言った。
「君のせいだ」小さな王子は言った。「僕は君が苦しむ事なんて何も望んではいなかった。でも君が飼い慣らしてほしいと僕に頼んだんじゃないか」

サン=テグジュペリ『小さな王子様』佐倉桃史訳

フランス語を学び始めた十代の頃には全く気が付かなかったのですが、今あらためて読むと、王子とキツネのやりとりはなんとも厳しく、続きを読むのが辛くなる程です。こんなやりとりにはなるべく関わり合いにならないで生きていきたいとさえ思ってしまいます。私は春の陽気のせいで少し感傷的になっているのかも知れません。あるいは、ようやく私もこの物語を理解することができる程度には大人になったという事なのでしょうか。

『小さな王子様』に登場するバラの花のモデルがサン=テグジュペリにとってまさしく「愛憎一如」を地で行くような存在だった妻のコンスエロであるという事は、彼女の回想録によって明らかにされています。コンスエロが語るところによれば、王子とキツネの会話に頻出する「飼い慣らす」“apprivoiser”という言い回しは、夫婦の間で交わされる一種の符牒だったそうです。どう考えても対等な関係にはそぐわないこの動詞は、親しい仲でのみ通用する辛口の冗談だったのでしょうか。

余談ですが、地中海の底から見つかった彼の遺品のブレスレットには、何度も別れと再会を繰り返した妻コンスエロの名が彼の名前の横に刻まれていたという事です。

イラスト： 世奈

転載，二次使用，AI 学習を禁じます。